

原 著

当院での生体腎移植における basiliximab 併用導入期免疫抑制療法 of 臨床効果の検討

寺西 淳一¹⁾, 服部 裕介¹⁾, 榎山 和秀²⁾, 鈴木 康太郎³⁾,
齋藤 和男⁴⁾, 増田 光伸⁵⁾, 野口 和美¹⁾, 窪田 吉信²⁾

¹⁾ 公立大学法人 横浜市立大学附属市民総合医療センター 泌尿器・腎移植科

²⁾ 公立大学法人 横浜市立大学大学院医学研究科 泌尿器病態学

³⁾ 横浜市南部病院 泌尿器科

⁴⁾ 東神奈川駅ビル内科・泌尿器科

⁵⁾ 増田泌尿器科

要 旨: 今回, 当院での生体腎移植における basiliximab (BLX) 併用導入期免疫抑制療法の臨床効果について後方視的に検討した. 術後6ヶ月以上経過した2000年4月以降の生体腎移植76例を対象とし, 導入期免疫抑制療法における BLX 併用の有無により BLX + 群と BLX - 群に分け, 急性拒絶反応及び腎移植後6カ月以内のウイルス感染の頻度, 腎移植術後入院期間, ステロイド使用量, 移植腎の生着率について比較検討した. 急性拒絶反応は BLX - 群では44.4% (4/9例), BLX + 群では13.4% (9/67例) で, 症候性サイトメガロウイルス感染の頻度は BLX - 群で高かった. 移植後入院期間は BLX + 群が54日, BLX - 群が83日で, ステロイド使用量は術後30日時点での1日投与量及び術後30日間の累積投与量とも BLX + 群は BLX - 群の半量以下であった. また, 移植腎の5年生着率は BLX - 群が88.9%で, BLX + 群は96.5%であった. BLX + 群では, ABO 式血液型不適合腎移植例等の免疫学的ハイリスク腎移植例を有するにも関わらず, 急性拒絶反応の発生率及びステロイド投与量の減少, 術後入院期間の短縮, そして移植腎生着率の改善などの利点が認められた. BLX 併用導入期免疫抑制療法は, 短期的には臨床的に有用な効果が得られたが, 移植腎の長期生着率の改善への効果については, 今後さらなる長期経過観察に基づく検討が必要である.

Key words: バシリキシマブ (basiliximab), 生体腎移植 (living donor kidney transplantation), 免疫抑制療法 (immunosuppression therapy)